

田中雅一編

『フェティシズム研究第2巻 越境するモノ』

京都大学学術出版会、2014年、4,800円＋税、493頁

牛久晴香

フェティシズムという刺激的なキーワードに惹かれて本書を手にとった方も多いだろう。フェティシズムは宗教、経済、性の三領域で使用されてきた、エキゾティック、異常、特異などと評価される信仰や欲望のあり方を指すものである（本書 iii 頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する）。そのなかで、フェティッシュは「胡散臭いモノ」「理性的な人間なら拒否するような、そんな代物」としてあつかわれてきた (iii)。読者のなかには、この本がフェティッシュの「胡散臭さ」の背景にある人間の非理性を暴くものと期待した方もいるかもしれない。

しかし、編者の田中雅一は「そんな代物」とされてきたフェティッシュを「一見透明な存在に見える身体やモノを考察する際に重要な起点」(iii) ととらえなおすことで、西洋近代的な思考枠組に再考を迫ろうとする。理性と非理性、モノと人といった二項対立的な認識構造自体を揺るがすことを目論むのである。

『フェティシズム研究』は、そのようなフェティッシュ／フェティシズムをキーワードに、「通文化的かつ研究領域横断的に現代社会における人・身体・モノの関係について考察を深める」企てである (i)。全3巻のうち第2巻にあたる本書は、理論的な問題を中心にあつかった第1巻とは異なり、具体的な事例分析を通じて、モノが有する力やモノと人の関係を再考する試みであると理解できる。そのため、本書ではフェティッシュを「人に影響力をもつモノ、人を魅惑するモノ」(7) とあえて広く定義している。

それでは、モノをフェティッシュととらえることでどのような展望がひらかれるのだろうか。そのヒントは、田中がタイトルの「越境」にこめた三つの意味のなかに見いだせるように思われる (3-5)。それは、①「モノの履歴」やモノの（再／脱）文脈化を含む「モノの空間と時間の移動」という意味、②物質文化研究やモノ研究には収まらない、モノだけの研究にはとどまらないという意味、そして③「モノがモノの領分を超える」、つまりモノが人の領分を侵犯し、人びとの既存の関係を揺るがすことで新たな社会関係をも創出するという意味である。ここからも本書が、人を魅惑し動かしていくモノの力をつよく

意識化することによって、モノ一人関係論を刷新しようとする挑戦的な作品であることがうかがえる。

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに

序章 田中雅一「越境するモノたちを追って」

第Ⅰ部 フェティッシュとであう

第1章 石井美保「呪物の幻惑と眩惑」

第2章 田辺明生「リングとファルス——フェティシズムの植民地主義からの解放のために」

第3章 金谷美和「装飾のフェティシズム——東アフリカの衣服カンガの誕生をめぐる」

第4章 細谷広美「コモディティ化するフェティシズムへの挑戦——社会主義国キューバのアーティスト、コロニアリズム、グローバル市場」

第Ⅱ部 フェティッシュをしんじる

第5章 藤原久仁子「変奏される伝説、転置するフェティッシュ——奇跡をめぐる欲望が生み出す人・モノ・場所」

第6章 田中正隆「モノ化する「運命」——西アフリカ・ベナン南西部の宗教実践」

コラム1 鈴木正崇「フェティッシュ・マーケット瞥見——トーゴでの体験から」

第7章 小牧幸代「聖なる複製・商品の信仰空間——イスラームの聖遺物とフェティシズム」

コラム2 木下彰子「大量生産された神像や宗教画を祀る——インドにおけるヒンドゥー教徒の家庭内礼拝をめぐる」

第8章 岡田浩樹「複製化し、増殖するブッダ——韓国仏教の物質化、ポップカルチャー化と忍び込むフェティシズム」

コラム3 上杉和央「モノと図譜と知識人、あるいは日本近世のフェティシズムの構造」

第9章 岩谷彩子「本物をのつとる贗物——インドにおける小生産物がかきたてるフェティシズム」

第Ⅲ部 フェティッシュをあつめる

第10章 田川泉「歴史の翻案——合衆国における博物館コレクションの政治性と象徴性」

コラム4 福西加代子「武器を欲望する人々——広島県呉市における戦艦大和の展示をめぐる」

第11章 窪田幸子「博物館とフェティシズム——秘匿と開示をめぐる地域博物館の抵抗と交渉」

コラム5 高木博志「近代天皇制の「秘匿性」と御物」

第12章 田中雅一「性を蒐集・展示する」

第13章 長尾晃宏「收拾のつかない蒐集」

第14章 川村清志「ガンプラというフェティシズム——モノと物語の相互作用」

あとがき

第I部「フェティッシュとであう」では、「コンタクト・ゾーン」（異なる文化の接触領域）におけるフェティッシュの生成とその創造性に注目した4本の論考がとりあげられている。

1章は、西アフリカのガーナにおいて、ヨーロッパ人がアフリカ人による物神や呪物（フェティッシュ）の信仰とその商取引ネットワークの越境性を恐れ、フェティッシュを徹底的に破壊し統制しようとした事例をとりあげる。石井は、フェティッシュがヨーロッパ人とアフリカ人の出会いと交渉を媒介したと論じたうえで、人はフェティッシュを活用し流通させ、破壊する行為者であると同時に、自己の身体をもってフェティッシュの流通を媒介する「媒体」でもあると指摘する。そして、フェティッシュは人びとの企図や行為を超えて「秩序＝経済」を構築しつつける、脱人間主義的な特性をもつモノであると論じている。

2章では、近代ヒンドゥー教の立役者であるヴィヴェーカーナンダがとりくんだ社会奉仕活動と、ヒンドゥー教のシンボルのひとつ「リング・ヨーニ」の関連性が検討される。

「リング・ヨーニ」は「女陰に生えた男根」を表象しており、モノと霊性、現象と実在のあいだのような「不二の関係」を体現したものである。田辺は、「生けるものはシヴァ神である」というヴィヴェーカーナンダの社会奉仕活動が、リング・ヨーニの「不二の関係」の実践的表出であると指摘する。そして、自己と他者との関わりを絶えず構築しなおすことを可能にする「リング・ヨーニ」のようなフェティッシュを「よきフェティッシュ」と名づけ、それが統治される者とする者といった植民地主義的な二分法秩序を解体し、再構築する創造的可能性をもっていると主張する。

3章は、インドのグジャラート地方と東アフリカ沿岸部のふたつの地域の布に同じ文様が用いられた要因について論じている。金谷によれば、産業デザインの開発が盛んになったイギリスでは、文様の蒐集（「装飾のフェティシズム」）がすすみ、グジャラート地方の絞り染め布の文様もそのなかに含まれていた。地域の社会的・文化的文脈から切りだされた文様は、機械織りの木綿多色染布に張りつけられて輸出され、東アフリカで広く受容された。本章は、文様と意味を断絶させる「装飾のフェティシズム」を結節点に、コロニアリズム、蒐集活動、商品化が結びつくようすと、その過程に潜む暴力性を描きだしている。

4章では、キューバの現代美術アーティストの経験と実践に立脚して、美術市場のグローバル化やコモディティ化といった現象を検討している。西欧の文化システムとしての美術の世界で、アーティストは西欧美術史の文脈にキューバというローカリティを位置づけることでシステムに参入した。一方で、彼らは移動のなかで多様な文化と関係を結ぶことで、自己とローカリティとの関係を変容させながら創作活動をつづけていた。細谷は、「人を魅了する」力をもつ彼らの作品をフェティッシュととらえて、それが美術の「コモディティ化」に抗する原動力となりうると期待をこめて論じている。

第Ⅱ部「フェティッシュをしんじる」は、信仰対象、商品、もしくはその両方の特性が密接に絡んだフェティッシュに注目して、「フェティッシュをしんじる」人とモノ＝フェティッシュの関係性をあつかっている。

5章では、「信仰治療師」フレンチ氏の自宅であった、マルタ島の歴史民俗博物館で入手できる「癒しの水」がフェティッシュ化し、信仰の対象になる過程を検討している。その過程では、マリア出現の奇跡が「マリアの癒しの油」へ、さらにはその油を用いて治療をおこなったフレンチ氏の自宅の井戸の水や「フレンチおじさんの写真」へと、奇跡の意味が読みかえられ、フェティッシュとなるモノや場が次々に転置していた。藤原は、伝説が変奏されるプロセスの中心に人間の信仰心があることを指摘し、フェティッシュ・ネットワークが生成されるダイナミズムをあきらかにしている。

6章は、西アフリカのベナンに暮らすアジャの人びとが、儀礼のなかで「運命（ポリ）」をあらゆるかたちに「モノ化」する実践に注目する。田中正隆によると、モノ化されたポリはモノ、人、祖霊、施術師など儀礼に関わるさまざまなアクターのネットワークに組みこまれ、その相互作用のなかで組織化されていく。田中は、その意味においてアジャの人びとのポリは開放的・関係的・能動的であると主張し、西アフリカ諸社会の「運命」概念の特徴とされてきた「受動的な生」という見方に再考を迫っている。

7章は、イスラームにおける聖遺物信仰の実態をとりあげる。聖遺物は「バラカ（神に起源する祝福の力）」の容器ないし媒体としてあつかわれており、その対象は聖者の毛髪や骨片にとどまらず、聖者にゆかりあるもののレプリカや、それらをモチーフにしたポスターにまでおよぶ。小牧は、複製され商品化されるポスター等の「聖遺物グッズ」を、ある人は単なるモノとしてあつかい、他の人は特別なモノとしてあつかうことに注目し、モノがフェティッシュ化、脱／再フェティッシュ化するプロセスにおいて、人による「見立て」が重要な役割を果たすことをあきらかにしている。

8章は、韓国仏教のマスコットキャラクター「プッチョニム（おシャカちゃん）」の増殖という現象を検討している。岡田によると、この現象はフェティッシュな欲望（モノの所有）を厳しく制限してきたエリート主義的な儒教的世界観が、韓国の経済成長による大衆の拡大を背景に崩壊していくなかで、宗教の私事化と商品フェティシズムが接合した結果現出した。その過程では宗教的小物が本来もっていた精神的・信仰的な意味が剥奪され、商品の体系に絡めとられていく「宗教のポップカルチャー化」が進行していると指摘する。

9章では、インドの商業移動民ヴァギリが販売するフェイク（たとえばウシのひづめでできた「ジャッカルの角」）がフェティッシュとして流通する過程を検討する。岩谷は、ヴァギリが土産物屋の店主、ヒンドゥー教徒、そして外国人観光客と売買交渉する過程を観察したうえで、フェイクの流通を支えるのは「効きそうもないけれど、効くかもしれない」という失敗を想定しながら期待する買い手の心であると指摘する。そして、フェイクがもつフェティッシュな力を、一種の賭けを誘発する「逆転の場に誘い出す力」ととらえなおしている。

第Ⅲ部「フェティッシュをあつめる」には、公の博物館、公と私のあいだにある秘宝館、私である個人といった、さまざまな主体が蒐集（収集）する形態に注目した5本の論

考が集められている。

10章では、アメリカ合衆国の博物館を舞台とした、先住民やアフリカ系アメリカ人、原爆やベトナム戦争の歴史像をめぐる政治的、経済的、社会的な駆け引きの様相が描かれる。田川は、異なる価値観をもつ個人や集団がコレクションに対する多様な解釈を発露させることで、コレクションがもつ意味の多義性が確認されると同時に、人とコレクションの関係が再構築されていくと論じる。この意味において、博物館は現代のコンタクト・ゾーンであり、コレクションはフェティッシュである。本章をとおして、現代のフェティッシュが生み出すモノと人の関係性の複雑さや多義性が浮き彫りにされている。

11章は、カナダとオーストラリアの部族博物館における儀礼具や遺物の展示に対する先住民の反応に注目する。カナダの先住民は積極的に博物館の展示に関わり、展示物やその説明内容を変えることによってマスターナラティブに「抵抗」した。一方で、オーストラリアのアボリジニは、儀礼と密接に関連した自分たちのモノを博物館で開示することを拒否することによって「抵抗」した。窪田はこうした反応の違いをふまえて、地域儀礼と博物館ではモノに対する人間の視線や態度が異なることを「秘匿と開示」という言葉で指摘すると同時に、両者の態度ともモノの力によって引きだされていることに注意を促す。そのうえで、文化人類学がモノを文化の一側面として軽視してきたことを批判し、モノ自体がもつフェティッシュな力に光をあてる必要性を論じている。

12章では、「秘宝館」における混沌としたモノの展示の仕方に着目し、そこで田中が感じとったフェティッシュの力について論じている。田中は、展示物の「分類を否定する」ようなエネルギーは、啓蒙的な知の体系だけでなく、自らの欲望を分類して理解しようとする蒐集者のセクシュアリティの探求をも攪乱すると指摘する。そして、こうしたエネルギーは現代のあらゆるレベルの平準化に抗する力に結びつくものであり、そこにフェティッシュの現代的機能が見出せると論じる。

13章は、人が收拾のつかないモノの蒐集に走るメカニズムを検討している。長尾は、自身の蒐集活動を参照しながら、人は「運命的にも思える出会い」をきっかけにモノを蒐集するにつれて、その関心が「欠落の発見と探求」にむかうと論じる。こうした「ないもの」を埋め合わせようとする行為の副産物が、收拾のつかない蒐集である。本章は、何でもないモノがフェティッシュとなり、人を魅了するメカニズムをあきらかにするだけでなく、蒐集家という「ディープでヘビーな」消費者をとりあげることで、個人の情熱や生きがい、祝祭性といった消費フェティシズムの積極的な意味を浮きあがらせている。

14章では、ガンダム・プラモデル（ガンプラ）の展開におけるモノ——物語——メディアの関係性を検討している。ガンプラは元来『機動戦士ガンダム』に登場する諸兵器を再現したプラモデルであった。その後、詳細な背景情報とともにテレビや映画に登場していない兵器が製品化されるなど、ガンプラが独自の展開をとげることによって「大きな物語」に影響をおよぼすにいたった。川村はこのようなガンプラの展開を、物語の魅力、雑誌等メディアの力、生産側の技術革新、消費者の想像力が双方向的に影響を与えあう「らせん的進化」のプロセスととらえる。そして、商品フェティシズムの議論における「市場経済とメディアミックスのフローに押し流される消費者」という構図に再考を迫ってい

る。

以上のように、いずれの論考もモノと人の双方向的な関係性に立脚することで、それぞれの研究分野において斬新な議論を展開している。評者はアフリカ農村でつくられ、日本や欧米で消費される手づくりバスケットの生産と流通に関する研究をおこなってきたが、本書のすべての論点を網羅することは評者の力量を超えている。そこで以下では、評者がとりくんできた研究に照らしあわせながら、本書があたえる有効な視点と今後期待したい点について述べる。

まず、本書が提示する有効な視点のひとつは、大量生産品や土産物にも人を魅了する力があるのとらえ、そうした商品をモノ研究、物質文化研究の正当な対象に含めたうえで、宗教実践や商品の消費におけるモノと人の関係性に再考を迫る点である。とくに評者が対象にしてきたような「周縁地域」で生産される大量生産品や土産物については、モノ研究や物質文化研究よりも、観光人類学や政治経済学的な視点から研究がすすめられている。それらの研究ではその真正性や経済性、あるいは商品を消費する主体の倫理性の問題が強調される傾向にあり、人を魅了するモノとして十分に検討されてきたとは言いがたい。

この点に関して、本書は人による「見立て」の必要性(237)を指摘することで、大量生産品が人を魅了する力をもつにいたるプロセスを明確にした。イスラームにおける聖遺物グッズやヴァギリが販売するフェイクのように、真正性は必ずしも「見立て」の際の基準にならず、モノの物理的特性などに感化された、それを欲する人の心がより重要となる。そうであるからこそ、ありふれた商品にも人を魅了し動かす力を認めることが容易になる。同時にこのことは、人を魅了するモノの力がおよぼ範囲に限定があることを明瞭にする。人による「見立て」の指摘は、大量生産品や土産物がもつフェティッシュな力を強く認識させるだけでなく、認識論的・信念論的な説明とは一線を画して、その力を現実在即して説明することを可能にした点で画期的である。

さらに、本書は「見立て」を経てフェティッシュとなった大量生産品が、単に既存の社会関係を再生産するための記号として機能するのではなく、生産者や消費者を巻きこんで文化的な創造のプロセスを促進しうることを示した。「フレンチおじさん」の写真に聖性が見出されるまでの過程やガンプラの「らせん的進化」の事例は、その可能性を具体的に論証している。この視点は、生産者や消費者の社会経済的地位や消費の倫理性の問題にとらわれない議論を可能とし、「周縁地域」から輸出される大量生産品をモノ研究の土台にのせるためにも重要な示唆をあたえてくれる。

むろん、こうした創造性の意義については個別の検討が必要である。田中(序章)や岡田(8章)が指摘するとおり、「根拠のない幸福感」に満たされた「フェチ・ブーム」は、常時短絡的な欲望につき動かされる人間や、消費主義が全面的に展開する表層的な精神世界の創出に帰結する可能性がある。また、第I部の各章で明示的に描かれたように、すべてのモノが社会的に意味ある創造をもたらすとは限らず、フェティッシュ化のプロセスがアクター間の非対称的な関係にもとづいた暴力をとまなうこともある。

こうした点に留意しつつも、大量生産体制に組みこまれたモノが魅力を帯びていく過程をとらえ、それが文化的な創造を促進する可能性を明示することで、フェティッシュ研究

はモノ研究の対象と地平を大きく広げたといえよう。

その一方で、「越境するモノ」の可能性を考えると、地域や国を越境するモノが、空間や文化的差異を超えて新たな社会関係を結んだ事例が検討されていないことは残念であった。もちろん、本書は同一のモノが異なる地域に越境する事例（3章）や、特定の場における文化的他者の接触の事例（1章）をとりあげている。しかし、直接的な接触が事実上不可能で、モノを介したつながりしか具体的な関係をもたない二者（たとえばアフリカの生産者と日本の消費者）のあいだに、モノはどのような社会関係をとり結ぶことができるのかについて、若干の疑問が残った。

たとえば、アフリカのモノが日本や欧米に流通する際には、モノが生産者の社会的な背景も含めて消費者に販売されたり、価格や売れゆきをとおして垣間みえる消費者の社会や文化を、生産者が独自の論理で消費したりする。フェティシズム研究の視点に立つと、こうした異なる地域に暮らす生産者と消費者の関係性はどのようなものとして描くことができるのか。商品が創出した経済的なつながりは、どのような社会関係に発展しうるのか。本書の冒頭で挙げられた、空間と時間を自由に越境し、新たな社会関係をも創出するモノの力は、グローバルな空間スケールにおいてこそ、その真価を発揮すると考えられる。そして今後、本書の視点に立脚してこうした社会関係の研究がすすめば、グローバルに流通する商品をめぐる諸現象を理解するための新たな世界像が提示されると評者は確信する。

本書を読み終えてから、評者のモノ一人関係のとらえ方は大きく変わったように感じられる。モノ研究や物質文化研究にたずさわる文化人類学者はもちろんのこと、モノの生産や流通、商品経済をあつかう他分野の研究者、また研究者以外の読者にも広くおすすめしたい一冊である。